

シリーズ「50年後の国土への戦略」

50年後の国土整備を担う人材の育成—大学の役割と学科名称を考える—



落合 英俊
論説委員
九州大学 理事・副学長

50年後の国土整備を担う人材の育成をテーマに、大学の役割と学科名称について考えてみたい。筆者はちょうど50年前の昭和38年（1963年）に大学に入学し、以来今日まで継続して大学に籍を置いている。大学の世界しか知らない者であるが、社会との関わりを常に意識しながら教育・研究・学会活動等を続けてきた経験を踏まえて考えたい。

大学に入学した50年前、当時の国家的な大事業であった黒部峡谷のダム建設（黒四ダム）や若戸大橋建設などに憧れ、自然を相手にする仕事に就きたいという思いから土木工学科に入学した。当時の社会情勢の影響もあったが、大学の学科名と将来就職する仕事の関わりについて高校生なりに理解していたように思う。

学生時代は社会資本整備の最盛期と重なり、東海道新幹線、名神・東名高速道路、琵琶湖大橋、天草五橋などの建設・開通や東京オリンピックの開催・都市開発などが、社会的に注目され、歓迎された時代であり、夢のあるプロジェクトの実務を見聞・体験する機会が数多くあった。それは、今から振り返ると、自分達では意識せずに、社会や企業、先輩達から、PBL（Project-based-learning）による教育を受けていたと言える。社会全体が右肩上がりの成長をしている時には、特に意識しなくとも、学生が将来に夢を持てる体験をする機会が社会に多くあった。しかし、そのような状況は、時代により、分野により変わるので、これからは、学生が社会から学ぶことの意義・内容について、大学が意図的・戦略的に、教育活動の仕組みとして取り込むことが必要であり、社会資本整備を使命とする土木分野においては特に重要である。

少子高齢化の進行、人口の減少、地方の過疎化・都市の過密化、産業構造・就業構造の変化など、様々な課題・状況が想定される中で、大学の機能の再構築が求められており、国立大学改革の基本方針として分野のミッションの再定義が行われている。大学・学部を設置目的を明確化し、公的教育機関としての存在意義を「見える化」するものである。50年後の国土整備を担う人材の育成を考えるうえで、土木分野のミッションの再定義は重要な課題であり、慎重な対応が望まれる。

大学においては、バブル崩壊後の1990年代に入り、土木分野の業務内容や「土木」という単語のイメージが良

くないなどの理由により、学科名から土木という言葉を廃する大学が増えだした。現在、国立大学において、「土木工学」の学科名を用いている大学は、環境や海洋という用語と組み合わせた学科名を含めても、わずか7校のみである。学科名から土木という単語を廃した新たな名称は、「都市」、「社会」、「地球」、「環境」、「社会基盤」等の単語を用いた学科名である。これらは、土木工学分野の対象を表す用語と考えることができるが、分野としての統一性に乏しいことが懸念され、また、専門性を過度に重視する傾向をもたらしめているように思われる。

その一方で、学問・学術の分野では、土木工学の名称が公式に広く用いられている。わが国の科学者コミュニティの代表機関である日本学術会議は、土木工学を学術分野の一つとして位置付けている。また、科学技術の総合的振興に関する重要事項や学術の振興に関する重要事項を調査審議する文部科学省の科学技術・学術審議会は、科学研究費の「系・分野・分科・細目表」の策定において、土木工学を工学分野における主要7分科の一つとしている。これらの影響もあって、大学においても、土木工学という言葉は日常的に使われているし、われわれが所属している学会の名称も土木学会である。

国際的に通用する技術者として認められるには、一定の質の技術者教育を受けていることが基本要件とされており、国際競争が激しくなる中で、人材育成を使命とする大学の役割は益々重要になっている。国立大学において分野のミッションの再定義が行われているこの機会に、大学の学科名称について、学を中心にして、学会主導のもとで広く議論されることを提起したい。学問・学術の世界で公式に広く用いられている専門分野の名称とするのか、それともその分野が対象としている適切な用語を用いるのか、あるいは他の考え方をするのか、多に意見を交わして欲しい。そして、合意が得られれば、多くの大学がそれを受け入れて欲しい。それによって、50年後の国土整備を担う人材を安定的に育成・輩出できると考えるからである。

ちなみに、筆者は「土木工学科」に再統一し、その名称を誇りと自信を持って社会に再認識させる活動をはじめることが適切と考えている。土木工学は社会資本の整備・維持・管理と環境の創造・保全を主な使命とする学問・学術分野であり、総合性と社会性を特徴とする分野である。その特徴を確実に担保するためにも、「名は体を表す」のとおり、土木工学の名を直接、用いるのが分かりやすいし、世代を超え、長期にわたって、社会で広く受け入れられる名前として、大学の学科名に相応しいと思う。